

---

# Rebellion to Jupiter

茶川竜之介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Rebellion to Jupiter

### 【NZコード】

N3296Z

### 【作者名】

茶川竜之介

### 【あらすじ】

世界は変わり果てた。人、一人一人が目の前に必死にしがみついている。

あるとき、動物は獣へと変わり、人間への反撃を始めた。

人間が取った反撃手段。獣に対抗できる人間兵器を作った…。

実験人間兵器として、戦う一人の少年は生まれたときからある特別なプログラムがあつた。

## プロローグ

世界は、変わり果てた。人、一人、一人が目の前の『生きる』と言ふことに必死にしがみついている。

具体的には、世界がどう変わったか・・・。

2350年代。アフリカ大陸で、猿の突然変異が発見された。が、このことは公表されずに闇へと葬られた。

5世後。各地で、動物の凶暴化、肉体の急激変化、知能の急上昇そして、動物は人類に今までの反撃とばかりに襲いかかった。5世紀当初の人口から5世紀中盤には、五分の一に減った。この頃、世界は一つの機関を軸に動いていた。進化した動物たちは、動物から獸と呼ばれるようになつた。

獸は、銃に撃たれても、すぐに修復し、現代兵器・銃は、あまり効果がなかつた。

唯一の弱点と見られているのは、背骨だつた。背骨を破壊、つまり折つてしまえば良い。

しかし、背骨を折るには、人類は肉体能力が足りなかつた。そのため、機関は獸に対する、戦略核兵器を使用した。これにより、獸は減少したが放射能汚染が拡大した。

使われた核兵器の量はものすごい量としか伝えられていない。とにかく、大半の人類は放射能によって蝕まれた。

残された人類は、手を取り地上シェルターと地下シェルターを建設した。

シェルターは世界中に点在している。

その10世紀後、人類は放射能に対する耐性が出来たと言われている。10世紀後ほどから、放射線による死亡者が減つた為だ。

しかし、それは獸も同じようだつた。獸への非核の対抗手段として、背骨を破壊を出来るだけの運動能力を持つた人を作ることを研究。そして、獸細胞を人に投与できるようにした、N131獸化細胞を

開発。この、細胞を投与した人は飛躍的に身体能力が上昇したが、獸化細胞に対応した体をもつ人は少ないことが分かった。また、投与の方法は、2つ。受精卵の時に仕込む方法。もう一つは、成体に注射で注入する方法。

この、N131獸化細胞を中心とした、BP，Beast，Person計画が全世界で始動した。

そして、僕はBP計画始動2世紀記念で開発された。N383獸化細胞を使用した人をアシストする為に研究された、N282獸化細胞を胎児の頃に投与された。N0,28200001。名前は、みなど。

## プロローグ（後書き）

皆様、知っている方は久々です。  
知らない人は初めまして。

茶川竜之介です。

よく連載小説を途中放棄していますが……この作品は、冬休みマジで  
気合いを入れる作品と言つ事で。冬休み最終日までの連載終了を目指  
して執筆します。

文才は全くないんですけど、よければ、最後までお付き合って下さい。

## 訓練生

「以上。訓練生の授業はここまで。」

と教官が、部屋から出て行く。それと同時に、教室中の誰もが、実戦演習の為のプロテクター、対獣用刀を装備した。

僕も、もちろんながら例外になる訳でなく素早く、装備する。みんなの波の中で、逆らう訳でもなく波に流れて行く。

演習場で整列する。

「よし。各々いるな… 卒業演習を行う。この前、発表したチームで行つてもいいつ。」

「はっ」

「これで、卒業できるか出来ないか決まるからな… 気い引き締めうよ。」

と指導員が付け加え、訓練生はチームごとに散らばる。

「改めて、ようじく。」

と班長のマック・ペリー（男）がにこっと笑う。

「まあ、湊とは、よく組んでるじゃん私ら」

すこし、目つきが悪い（本人気にしてる）メリーハンソン（女）が投擲槍を渡す。

「さんキュ。確かにね。君等なら安心できるし。」

腰と、スボンについている槍入れに納める。

「いや、しかし和夏は？」

「いるよ」

とマックのほっぺたを指で突き刺す。

「目標は、ここにやくつても、ライオン獣種が4つ。これが、突然現れるからうまく擬似背骨を折る。」

「「「りょーかい」「」」

とマック以外の残りで言つた。

「よし。第9班！」

「はつ」

「全員だな。よし。出撃！」

教官の声と共に、僕らは地面を強く蹴った。この人蹴りでかなりの速度が出る。

チームは、常に無線で連絡しあう。

『生臭い。』

『了解。』

『どこだ？』

僕は、投擲槍を一本足から取り、背中に投げつける。擬似背骨に刺さったのを確認し

上空に飛ぶ。といつても、市街地の家の屋根に乗るだけ。

『一体処理。多分、西。』

『私が向かう。』

和夏が返答をする。

他は…。僕は、アシストタイプなのでこうこう、探知能力は高い。

『あとは…。東若干北。』

と言つて、ため息を吐く。

『確認。』

マックの低い声が響く。

『アツなんか見つけた。』

とメリーが報告を入れた。終わりだ…これで。

「任務終了。おつかれ。」

と指導員がにこつと言つ。みんなが一応感謝を述べて、座り込む。

「疲れた。」

と和夏がみんなの感想を言つてくれた。

正直、ここまで、訓練の範囲が広いとは思つてなかつた。

「よし。全員帰投。今日は寮に帰つて休め。以上」

対獣戦闘訓練所卒業式。

「諸君等は、この3年間。よく耐えた。以上！」

「よし。主席は、美作和夏。2は、マック・ペリー。3は、佐々木純。4はメリー・アンソ。…」

会場が少しづわつく。和夏に関しては主席で良いと思う。だけど、多分僕はだいたい15位だったかな…。まあ自分にしてはよくやつた！多分…。教官が成績優秀者20番までを言い。式が終わつた。主席20番目までの僕らは、多分同じ戦場にいるだろう。僕らを街を取り戻す為に。

「第2極東地上支部へようこそ。君たち150名には、人類を獸から守つてもう。いや…君の愛する人を守るべき物を守る為に全力を尽くせ。」

「強襲部隊は、左。守備部隊は、真ん中。遊撃部隊は右に集合。」

僕は、なぜか強襲部隊なので、左の列に入る。そのまま、誘導され。

強襲部隊兵舎に来た。昔ながらの日本式の建物で実に趣がつて：これ、本当に、兵舎か？

「敬礼つ」

急に言われて焦りつつ敬礼をする。

急に言われて、焦りつつしっかりと敬礼をする。

「私が、第2極東地上支部強襲部隊隊長。桐山だ」と、田算30歳に満たないと思われる女性が部隊隊長。

「第1小隊は…。第3小隊は美作湊。美作和夏。マック・ペリー。メリー・アンソ。」

一緒の隊…。波乱だ。絶対

「第3小隊の隊長。バリエだ。まあ、よろしく」とメガネをかけた若い男。

「一応、一期先輩になるかな？さちです。」

と優しい感じの少年。でも、名前はかなり有名だ。壁外訓練の時に

獣との戦闘に陥り、生徒50名が死亡した事故があった。

その時に獣を2体狩つたらしい。誰よりも冷静にかつ平常に。

あの事故は学校側と、守備部隊のチェック不足だったと報告され

ている。

僕らの時には、本来の動物見学をできた。挨拶をして、僕らは訓練になつた。隊長曰く、話しておく事と訓練はしておきたいらしい。

「対獣用刀はどのタイプだ」

「ええっと真ん中の物です。」

「そつか」

と隊長は一番左の対獣用刀を取り、一振りする。「まあ、なら安心か。うちの支部では、このどうやらかと言つて、この背骨を斬るタイプが主流だからな。」

「さて、適当に基本訓練させておいて、頼んだぞさち。」

と隊長はどこかへと去つて行つた。さちさんは、対獣用刀を2つ取り。こんにゃくを切り刻んで行く。

「…。さて、んじゃまず。斬り込みから。」

みんなが、こんにゃくを斬つて行く。しかし、斬れねえ……！

「…。角度が良くない。」

とせちさんに、軽く指導をしてもらひ。

言われた通りに、斬り込むとスパッと斬れた。

「…おおつー！」

「読み込み早いね。さて、他は…って。マック…」

みんなが、マックの方を見て、言葉を失つた。こんにゃくが、ち

ぎれているのだ。斬れている訳でなく。

さちによる、マックの徹底指導により一応は斬れるようになりました。その後、市街地機動練習。加速練習。持久走。遠距離攻撃。を行い一日は終わった。

今日は、なぜか掃除係といふことで兵舎内のぞうきん掛けをしていた。

「いやあ、平和だ。というか、太陽の下久々だ。」

「何を今更。昨日言えよ。」

とメリーが和夏を突つ込む。しかし、平和だ。獣なんか、いないみたいー。

と思った瞬間、警報音が鳴り響いた。

『全戦闘員につぐ。遊撃部隊、強襲部隊は、ただちに地下門へ集合。守備部隊は、Dブロック3区第45隔壁へ迎え！！』

「強襲部隊第3小隊。全員いるな。」

とバリエが指で人数を数えて言う。

「ただ今、第3小隊は欠員14名のため。遊撃部隊から14名借りている。連携は頼むぞ。それでは、今から作戦を伝える。我々は、Cブロック4区へと向かう。Dブロックに展開する隊が先発。Cが次発。Bが最終ラインだ。既に、獣の侵入が起きているらしく。最前戦には守備隊が展開している。あと、10分後には守備隊は隔壁に登り、撤退する。つまりは、隔壁を修理する為に守備隊は割かれ。我々、強襲部隊がなんとか獣からの都市への被害を軽減させる。命に変えても、守るべき人は守るぞ。」

「了解。」

全員が返事をし、装備を装着する。強襲部隊用装備は初めてだ。軽量型プロテクター。腕部プロテクター。対獣用刀。対獣用投擲槍。投擲爆弾。⋮。

最後の投擲爆弾は装備しなくても良いらしいが。

強襲部隊の服装は、パークーに半カーゴパンツ（槍容れ付）多機能タイプ、軽量スパイク。他の隊と比べればかなり軽いし簡素だ。全てを装備し終え。さちさんに装備チェックを行つてもらう。

「よし。出撃。持ち場に向かうぞ。」

全員で、指定された持ち場へと向かう。既に、守備隊撤退の信号弾は上がっている。次発の隊では一番最後に現場に入つたと思う。指定された区画の一番高い建物に上る。既に前方では、建物の破壊と戦闘が行われている。

「お前。探知タイプだな。状況は？」

「…。状況…か。音探知かこの状況なら。目を閉じ。聴覚に意識を集中させる。

「…。東側が押されていますね。大型の獣を音がします。」「そうか…まあ遊撃部隊が何とかしてくれると、隊長は後ろを見る。

「この第2極東地上支部はきれいな町並みだ。今、知つたけど…。」「隊長！信号弾！」

と遊撃部隊からの貸し出し隊員が叫ぶ。

「色は、赤…。よし行くぞ。信号弾あげる縁だ。」

と隊長は飛び降りた。僕は緑の信号弾を打ち上げ。他の隊員同様、隊長を追いかけた。

ぱつと見、緑の信号弾は4つぐらい上がっている。

「敵だ」

と言ひ隊長の声と同時に刀を引き抜く。が

「うわああ

「一二コソ…！」

遊撃部隊からの貸し出し隊員が食われた。既に囮まれているのだろつか？

「さち！」

「はい？」

「お前は、湊と和夏、マックとメリーあと、2人を連れて前のやつをやれ！他は俺に続け！」

隊員は反転し、隊員を食つた獣に向かつ。

「さて。犬型かな？」

とさちさんは獣の前で立ち止まつて言つ。獣は今にも食いつきそうだ。

「なら、躰がいるよねー。」

と噛み付いてきた獣を華麗に避け、背中に乗り背骨を斬る。

「…。さて、次は。」

「えつ…ど。少し北に。」

僕は、左を見て、後悔した。

ゲボボボツボオオ…。獣が、吐いているのだ。あれは、なんだ？人？人？こいつらが、いなければ僕らはー。投擲槍を一つ取り、獣へと接近する。

槍を、獣を目にめがけて投げる。獣の目から血が出ているのを確認すると、僕は、乗つていた建物から獣へと飛び降り、背骨へ刀を突き…。

「あぶない！」

「避ける！湊！…！」

気がつけば、体はものすごい速度で建物にぶつかつた。  
だけど、思ったより痛くない。体を起こすと、無線機が壊れていった。

「大丈夫か？湊」「

「ああ…。無線は派手につぶれたが。」

「ちょっと待つとけ。」

と、無線で連絡を取り合つてゐる。装備を見直すと、軽量型プロテクターがぶつかつた時、変な感じだった。

触つてみると、柔らかい…。これで衝撃を吸収するらしい。腕部プロテクターは割れていたので、取り外し。立ち上がる。

「行けそうか？」「

「多分。まあ、分からぬいけど

「んじゃ、作戦続行だ。」

マックが、地面を蹴つて、それを追いかける。刀を落としている  
くてよかつた本当にそう思いつつ。空を見ると、黒とか、赤の信  
号弾が上がっている。

「無線機がつぶれたらしいな。丁度、良い。退くぞ」と隊長がすこしにやつき、黄色の信号弾をあげた。

補給所につくと、第3小隊はかなり減っているみたいだ。  
「さち。そつちは何人やられた？」

「借り出し2人が。」

「そうか。装備を整える。刀は刃を交換してもらえ。」

僕は、無線機と、腕部プロテクターをもらい。和夏に声をかけると

「バカ！..」

「うえい？？」

まさか、最初にそう言われるとは悲しいよ。

「先に死んだら殺す！」

「いや、死んでるし」

「でも、殺す。」

そんな、泣きながら言われても。

「『めん。』

ともう一度謝る。と急に和夏はクスッと笑った。

「いつもなら私が怒られるのにね」

確かにそうだ。和夏はかなり昔から無茶をするし本当に色々あつた。  
一応は、和夏とは幼馴染みである。和夏は結構な美少女なのでち  
よつと誇らしい。

「ちよつとこっち来て。」

「さちさんに呼ばれ、

「本当にごめんね」

と、和夏にもう一言言つてさちのもとへと向かった。

「いや、生きてよかつた。ホント。どうかした?急に感情的に

なつて。」

「…。すいません。単独行動をして。」

「単独行動なんかどうでも良い。なんか、あつたのかなつて」

「まあ、色々と。」「そつか。まあ、言いたくないことは深く聞くかないでおくよ。君は知つてるか分かんないけど。僕の同じ訓練学校の同級生は50人。訓練生時代に死んだ。それは知つてる?」

「…。はい」

「その事を知つてるなら、君は知つてると思うけど。僕は、訓練生が50人死んだのを目の前で見た。正直びっくりしたよ。僕の隣が一瞬にして、消えたからね。」

さちさんは、すこし、言葉を止め瓶に入った。水に口を付けた。「食われたんだよね。10匹の獣に。その返り血が、ベチャつてかかつてさ。メガネが血まみれで、見えなくなつてさ。メガネをはずしたら、ぼんやりだけど、隣に居たやつの手が転がつてたんだよね。その時、無茶苦茶さ焦つて。刀を抜いたんだけど、思いつきり、腕斬つてさ。力が入らないんだけど、獣に向かつたんだよ。んで、気がついたら2体斬つてた。」

その後、さちさんは暗い話しあやつたねと笑つて立ち上がりて水を取りに行つた。

「壊れた隔壁は一時的に塞いらしい。あとは、獣掃討だけだ。俺等はDブロック2区の担当組に編入。獣の数は多いと聞いている気を抜くなよ」

とみんなは聞いた瞬間駆け出した。

Dブロックに入つた時にはかなりの数の赤の信号弾が上がつていた。

「前に敵！」

「さつきの別れ方で俺に続け。さち探索を続ける」

「了解」

隊長の指示を聞き、さちさんは左へと向かつた。僕はそれに続き、

ひたすらさちさんを追いかける。

「マック先頭に行つて」

とさちさんは言い。僕の横に来た。僕は隊列の2番田。丶字に展开して探索は行う。基本的に、高速移動しながら。

「探索は？」

「…。15時方向に」

「マック聞いたね？」

「了解」

さらに、スピードを上げ15時方向に向かつ。

「あと500M…！」

「戦闘展開。マックと俺は囮！」

とさちは言って刀を抜いた。僕は和夏とアイコンタクトを取り、左側へと向かう。和夏は右側へ。

刀を抜く。獣はサイタイプ防御力は高いが。

「食らいついた！！」 とマックからの報告を受けて、僕は投擲爆弾を槍に付け、サイの背中に投げる。

「爆弾行きます！」

うまく、刺さったのを確認し。爆発を待つ。…。まだいる？

「近くに嫌な感じが」

爆発を確認し、獣へと近づく。

「猿だ！！」

…。最もめんどくさい獣か…って、猿がこっち田掛けて、飛び込んでくる。

僕は、槍を素早くなげ、自分も、猿へと飛び込む。猿はギリギリで、槍を避け奇声を上げ距離を縮めてくる。

「キエエエイ！！」

とこっちも声を上げながら僕は猿へと、刀を一振り。なんと、腕を切り落とせたが、全く効果はない

「ウキイーきいー！」

いや、うるさくなつた。

「ゲベエエ！！！つーか死ねえいいいい！」

とメリーに聞いた通りに、正面から骨を狙う。正面から飛び加速すると、相手も正面から来た。当たる瞬間に僕は槍をとり、猿にさす。さるはかまわずに長くのびた爪で切り裂きにくるが猿の急所でもあろう股間を蹴り上げる。そして、落ちてきた所に背骨を斬つた。

「サイタ

卷之三

対戦用刀に付いた血を払い、さち、マック、メリー、和夏を追いかけた。

5

## 血の雨

「状況は良くない。既に、ロブロック2区の部隊は結構な数が撤退してる。そろそろ、次発の奴らが来るはずだ。俺たちはそいつ等を確認後撤退いいな」

「了解。」

隊長たちと合流して、比較的高い建物上で今は状況を探索中だ。

「信号弾赤確認！」

「探知！ 敵は？」

「…。猿？」

多分分からぬが入っぽい足音が聞こえる。

「良し。白兵戦だ。刀が苦手な奴は後方から投擲支援。良いな。」

「マック…。君に任せよう」

とさちさんは、自分がもつっていた槍を渡した。この行動を見て、みんなはもしものときの1本を残しマックへと渡した。

「前衛は、お前等と俺。」

と貸し出し隊員3人を指差し言つ。

「中衛は、残りのマック以外…。あと、煙幕あるなら焚いておけ」  
そう言つと、隊長は信号弾が上がった方向へ走った。

「さて、マック。これを隊長が向かつた先に撃つて。」

とさちさんが、煙幕弾を渡す。マックは、無言で受け取り煙幕弾を放つた。

「さて、前進だ。僕らの任務は支援だよ

大体、1分後に僕らは隊長たちを追いかけた。別的小隊もこの場にいるらしくかなりの数の味方の死体を目の当たりにした。

「敵！ 14時！」

「了解」

僕は刀を抜き14時の方向にいる猿に向かった。

「マック支援！！」

と言つて僕は、猿による爪攻撃を避ける為に建物の壁を蹴つて地面に降り立つ。マックが投擲爆弾を投げ、チンパンジーの近くで爆発した。

猿が騒いだのを聞いて、メリーガ猿の背骨を刺し斬った。が、メリーの後ろに猿が来ている。それを、僕は斬りに再び空中へ飛ぶ。右足のホルスターから、投擲槍を取り、メリーガ狙つ猿に槍を投げる。

「一旦退け！爆弾を使う！」

誰の声かは、知らないが無線で聞こえているので、同じ小隊の人だろう。

「了解です」

僕は一応返して、地面を蹴飛ばした。

僕とメリーガ去つたのを確認してあの路地が爆発した。

「状況は？」

と隊長の声が無線内で跳ねた。

「静かです」

メリーガ返して僕の元に来た。

「さちさんたちは？」

「行きますか」

と、僕は地面を蹴つて、さちさんたちの方に向かつた。

「さちさん！」

さちさんは少しキヨロキヨロと、周りを見て僕らを見つけて近づいて來た。

「お疲れ。隊長が、爆弾を仕掛けてたんだろう？」

「はい。お陰で、ずいぶん楽でした。」

「そうかい。さて、次はかなり状況は悪い感じだよ」と指を指す。指がさされた、方には巨大兵器としか良いようない獸を中心に猿系、犬系などの高機動系の獸が群がっている。「どうするんですか？あれ」

「今所は、うまくあの場に押さえてるけど。他の区の奴らが終わ

るまでは様子見かな」

「守備部隊による支援砲火を利用かな？うまく行くか分からぬけど。」

「しばらくは、このままか。」

「隊長たちからの支援要請だ。行くよ」

とさちさんは、建物から降りた。

「どうした？ つかれたか？」

とマックが少し心配そうにこっちを見る。

「まあ、少し。」

「らしくないな。お前が」

「そうか？」

さちさんに続くため、建物から降り、ふと考える。今、マックにしては珍しい事を言つたと思った。へらしいとかそう言つ事はあんまり好きそうじやないとばかり思つっていた。下に降りて、思うが予想以上に街は死体で溢れている。

「敵15時！」

「槍を投げとけ」

和夏の報告に素早くさちは指示を出す。今の指示を聞いた限り、隊長たちはかなり状況が悪いのだろう。そう言つ感じがする。

「っちー！」

とさちが、上へと大きく飛び上がる。前から、獣たちが向かってきているのだ。僕も慌てて、地面を垂直に蹴り建物の壁を蹴つて屋根へと上がる。ついに来て思つ、さつきよつ黒と黄色の信号弾の数が多い。

「隊長を見つけた。俺が回収する他は支援しろつ」

とさちさんは、止まつている隊長のもとへ飛んだ。

「18時よりさつきの奴らがつ

「マック支援。俺が行く」

僕は、槍を一本取り、3体の獣へと向かつ。やつらを、かわし、一匹の背中に槍を突き刺す。他は、ぼくになんか、目もくれずマック

へと突進して行く。マックがあわてて、槍を投げるがそれを当たるうとも獸は止まる事がなくただ突進した。マックが引きちぎられた。僕の目はその情報を正確に伝えた。

「マックうう！！」

僕以外の2人も同じく口にしていた。

約束したじゃん。一緒に故郷を取り戻そうつてー。

撤退の鐘がむなしく響く。最後の槍を手に取り、マックの肉をもつて行く獸を冷視した。そして、僕が、蹴りだそつとした時に

「ビシヤツ！！」

すでに、マックを食らつていた2体の獸の首が吹き飛んでいた。斬られた断面から、血が噴水のごとく吹き出す。白い髪の毛が血で赤く染まつてしまつた和夏がそこに立っていた。

「和夏っ！！」

僕は、倒れて行く和夏のもとへと飛びそつと倒れないように抱きかかえる。そこに居たのは、いつもの和夏だった。

「…。ここは…どこだ？」

「あつ、気付いたようだね。」

と、わちさんが読んでいた小説にしおりを挿みパタンと閉じた。

「…。どこですか？ここ」

「（こ）こは、第2極東地上支部強襲部隊兵舎医療棟だね。」

「…。戦闘は終わつたんですか？」

「終わつてるよ。まあ、結局隊長を抱えて出て来たら遊撃部隊第4小隊の人たちに君たちが保護されててね。守備部隊による砲火門総砲撃をおこなう直前だつたから、ホントに助かつたよ。他に誰もいなかつたら僕らは死んでいたよ

「こう事は、隔壁内での掃討作戦は終了したんだ。

「和夏は？」

「隣。」

「そうですかつて……」

久々にビビった。まさか、同じベットにいるとは  
「これは、ベット数足りねえーし……みたいな？」

「全く違う。気がついたら

……ある意味すごい。

「あつそうだ。多分。若干の心に問題があるだらうから君も気をつけなよ。N282、N383もまだ詳しくは分かつていらない獸化細胞だし。あと、メリーはN181獸化細胞を投与されていてちょっと問題が発生していてね。」

「ちょっと問題？」

「まあ、君は元々色々な特別教育を受けているから知ってると思うから言つけど。N181獸化細胞は、非常に汎用性をもつているんだが、精神的衝撃を受けると獸化細胞が不安定になり身体が危険にさらわれる。今は、安定化をしているらしい。」

らしい……僕らは実験兵器。兵器であり、実験体でもある。もし、その実験体が死んだとしてもスペアはいる。

「まさか、メリーは処分ー。」

「いや、それはないとと思う。確信はないけど……。実質、N181獸化細胞を投与されている実験体はほとんどない。でも、計画自体が頓挫してるから……」

「信じましょう……先輩」

「……わかつた後輩」

と、さちさんは仕事があるからねと病室から去つた。少しの静寂。といつても看護士などの足音や機械類の音はあるが

「……マック……」

「……」

そつと、和夏の髪の毛を撫でる。いつも白い髪の毛だ。赤色に染

まっていたのが嘘みたい。いや、嘘と思いたい。

僕は、再び和夏のとなりで寝てるのは流石にまずい思い。ベットから降り近くにあつた椅子へと腰を下ろした。

「生きてたか。バリH」

「…。残念ながらね…どうも、俺は死神みたいだ」とバリエは普段はあまり言わない自虐を吐き、見舞客に目を向けた。「いや、しかし俺みたいな一小隊長の見舞いなんかに来るほど暇か?強襲部隊隊長さん」

「なんだ、人がせっかく来てやつてるのに。相変わらず、可愛くないな…お前は」

花束を無造作に、病室の机の上に置き強襲部隊隊長桐山は椅子に座つた。

「今日は、何のようだ?なんかまた、どつかの隊が問題でも出したのか?」

「いや…。今回の防衛戦は犠牲者が多すぎてね。うちの隊だけで7名死んでね。大幅欠員だよ」

「それで、まさか巡察に行くんすか?俺が」

「いや、この前も行つてくれたじゃん。どうせ、しばらくその体じや獸化細胞があるとはいえないんじゃないでしょうに。両足骨折だろ?なら巡察ぐらい松葉杖付いて行つてこー!」

「…命令?」

「命令!…」

「了解しました」

バリエはぶつきらぼうに言う。それを確認して、桐山はそれでは明日に第5地下支部と付け加え病室から出て行つた。

桐山が隊長室に戻ると、たちが来ていた。

「さあ。きみは、バリエを救つた代わりに一人の新兵を失つた。そ

して、生き残った3人も負傷している

「はい。僕が、独断しました。」

「…。やっぱり、あれか？」

「…何の事でしょう？」

「いや、バリエから聞いてないのか？」

「いえ、何も？」

「そうか、ならない。3人のケアしつかりな。あと、バリエはしばらく戦えない。さちが代理隊長だ。いいね」

「はつ。着任します。」

「ん。さがつて良いよ」

「失礼します」

さちが出て行つたのを確認し、桐山はため息を吐いた。あの時をもいだしてー。

こんな会話をしているが、市街地機動練習をしている。市街地機動とは、屋根と屋根を飛び移つたり壁を利用して、獣からの攻撃及び追撃を振り切る移動戦法。ちなみに、訓練学校ではこれで欠点を取るとよっぽど座学で高くないと卒業できない。しかも、卒業したとしても技術開発局にしか配属されない。

「さてと、もうちょいスピードを出すか

とさつきより、気持ち強く壁を蹴る。市街地機動では、基本装備のスパイクと投擲槍を使う。着地時に、止まる為に槍を差し込み止まる。スパイクだけでも可能だがスパイクだけでは即時停止は厳しい。特に、スピードを求められる強襲部隊はスパイクの歯の数が少ない軽量型スパイクのためよけいに必要になる。

屋根の上に着地する前に反転し、先に槍を滑らせスピードを落とし足をつけたと同時に蹴る。

うまく、急転換が出来て安心しつつ後続の様子を見る。うまくできているよつて良かつた。

そのあと、大体2回ぐらい休憩をいれて、2時間ほど市街地機動をして、今は備品整備をさちさんに教えてもらつていて。

「つづの正式採用の対獣用刀は刃がセラミックなんだよね。だから、斬るように言われている。まあ、うちが海の近くで鉄刃だとさびるつていう悲しい事実のおかげだけだ。」

さちさんは、そのあとダメな刃の見分け方と刃の変え方を教えた。

## 自の翻（後書き）

現在、低速執筆中。  
感想…暇があれば、くださー。お願ひします

## 仮設拠点調査任務（前書き）

すいません、タイトルを変更したいと思います。

12月17日土曜日にタイトルをRebellion to Jupiterに変えようと思います。

意味はJupiterは天地を支配する最高神つまり、話の中での獣  
獣への反逆と言う意味です。  
本当にすいません。

## 仮設拠点調査任務

「本日付けで編入されました。」

と僕よりすこしだけ、あとに戦場に来た人たちが僕に敬礼をした。

「えへっと、強襲部隊第3小隊に編入へ？」

「はい。」

「それでは、こっちです。」

隊長に言われた通り、誘導した。

「これより、第3小隊は第14小隊との合同市街地機動訓練を行います。」

第14小隊長が軽く説明を織り交ぜつつ、言った。簡単にルールをいうなら逃げ役に引っ付いているリボンを取るゲーム。

僕は、逃げ役。まあ、よく市街地機動は得意な方とみんなに言われるけど。

「いや～すばしっこい！」

とうちの隊員さつもんと14小隊の人たちが言ってくれた。

「さちさん途中から凶変しましたようね？」

「あ、確かに」

と同じ逃げ役の和夏が同意する。

「でも、メリーもかなり危ない」

と付け加えた。この言葉を聞いて、メリーは若干不敵な笑いを浮かべる

「いや、もうちょい足が通常にもどつたらつぶせるけどね」「つぶすって・・・」

全く、怖い怖過ぎる。殺す気満々じゃないか。

「先輩... もうむりです。」

と一応後輩が地面にたおれながらおのの口にしている。意外とスマニアのない人ばかりなのだろうか…

「任務だ。極東第2地上支部がいま、第2隔壁まで攻められている。これは、第3隔壁までのエリア奪還への作戦だ。今までの、強襲部隊の活動のお陰で隔壁の穴を全て確認した。穴は全部で3つ。一つは、第3隔壁工リアを封鎖した理由になつているファーストホール。僕らは、仮設拠点へと向かい。現状を調査そして撤収。これだけだ。」

「試運転ですね」

「そうだな。まあ気は抜くなよ。新兵は大体3／5の確率で死ぬ。そして、それを生き延びた者は洗練された狩猟者になる。そんなかんじか。マニュアル通りに言うなれば。」

隊長は少し笑つた。

「12時間後。強襲部隊第14小隊と共に出撃。」

「最近…湊は変わったよね」この和夏に言われたセリフが頭にこびりついて離れない。僕はこんなに神経質…いや違う。変わってしまつたんだろう。

僕は獣殺しに。

「久々だね。一緒に夜空を見るの」

「そうだね…小さい頃はよく見てたのに」

幼い頃に居たところは自然が豊かでとても静かだった。僕が住んでいたところは近くには、和夏しか近い歳の子供は居なかつた。

「いつか、お母さんお父さん弟妹の墓を立てるってマック言ってたよね」

「…。そういえば、言つてたね」

僕らは、ここまで、今居るこの極東第2地上支部を目指して来た。

今居るところから見えるのは、弱い者は獣に喰われ、強い者を喰う。弱肉強食の簡単なルールの世界。

もっと狩猟者は死なないと思っていた。あんなに厳しい訓練を受けたのに。マック君は…狩猟者に成れて良かつたのかい？

「装備確認。」僕は、和夏の装備を確認する。特に、問題はないので、僕の見てもう。他の隊員も済んで

「よしでは。只今より、第11仮設拠点に向かう。まあ、死ないようにしてくれ」

隊長は守備部隊と遊撃部隊への合図の信号弾を打ち上げ、隔壁から飛び降りた。みんなが順番に降りていく。壁の降り方としては、降下用のロープを使う。自分の番になり、降下用ロープを握った。

「よし降下！」

守備部隊の隊員が叫ぶ。僕は壁をロープを滑らせ壁をはって行く。下に着くと、守備部隊と遊撃部隊による支援のため獣は居らずに、同じ小隊隊員が展開して居た。

「よし、さちの方に行け」

「了解」

今回も、僕はさちさんが率いるチームの方らしい。隊長は、主に小隊を2つに分ける。

おもに、支援隊と攻撃隊に分ける。隊長が率いる方が主に攻撃隊。さちさんが率いる方が支援隊だ。

「よし。全員居るな。行くぞ」

隊長が、地面を強く蹴り隔壁から離れて行く。今日は、全強襲部隊が全仮設拠点の確認を行う日なので、守備部隊や遊撃部隊の支援の量がすごい。

「よし。状況確認！」

と、隊長は、旧市街地で停止して立つ。

「付近に足音なし。」

僕は、素早く言づ。他の探知タイプの人もうなづく。

「よし。では、ここで小休止」

この台詞を聞いて、みんなはおのれの好きに休憩をしている。まあ、探知タイプは小休止中にも気を抜けないが。僕は、ウエストポーチからクッキーを取り出し、食べる。しかし、全く空だけは綺麗だ。

「…。信号弾…」

色は黒。なにか、脅威になりえる獣でも出現したのか?「…。血の匂いが…」

「他の隊がやられたか」

通常、人は獣化細胞を使っても平地では獣には勝てない。それは数どつこうの問題ではない。いくら足搔いても圧倒的な力の差がある。「さて、出発しようか…。獣たちが向こうに向かうだろ?」「う

隊長は立ち上がり、隊員を見た。僕も立ち上ると、和夏が体を起こすのを手伝えと手を出した。和夏の手をつかみ、背中の方に重心を傾ける。すると、予想よりも軽く体が浮き、余計に引っ張ってしまった。和夏の体がどんどん僕の方に倒れて、少しマックの事を恨む。マックはいつもわざと体に力を入れて重くしたせいで和夏に迷惑をかけたじやないか。

バサッというで和夏が僕の上に倒れた。

「ごめん…。」

謝るけど全然和夏は反応を見せない。

「お熱い事で」

とメリーハニヤリと笑って、和夏の手を引っ張って起こす。  
「そんなんじゃないだろ?」

一応、反撃して僕は立ち上がった。はあ、付いてない。

「…。湊。わざとか?」

…た、隊長まで…。みんなが笑って隊長を追いかけて行く。僕も、少しあとにみんなを追いかけた。

結局、仮設拠点は全く問題もなく。  
また、旧市街地に居る。まあ、今は旧市街地で小休止でなく通過だが。

みんな、疲れている為まったく表情がない。

「…。血のにおい?」

「停止。探索しろ」

隊長は、全員を止めた。僕は、全神経を視覚にまわす。僕は、比較的視覚が優れているらしい。

「音…わずか。」

「若干の気配。」

「つチ…。仕方ないな。今から、作戦を伝える。第一目標は逃げる事だ。そして、誰か一人を犠牲としなくては行けない。まあ、いうまでもなく俺が行くが。」

「隊長。すいませんが、それは副隊長として、認められません。」さちさんが、いつになく声に力が入っている。

「うるさい。これは、命令だ。」

と、隊長はさちの頭をぽんぽんと叩いた。隊長はいつも通りの顔で閃光爆弾を確認した。

「さち、行け。おまえらは、守るべき命を守るんだ。」

「…。隊長…どうしてもですか？」

「お前らしくないな。お前は、俺の下に付いて強くなつたし、お前がもつてた良い所で俺を支えてくれた。だから、お前は独り立ちだ。今まで、支えてくれてありがとうな」

「…。田中さちお…了解しました。」

さちは、震えた声で言つと、僕たちや新兵の方を見て言つた。

「撤退。行ぐぞ」

「…。さて、これを使つときが来るとは」とある硝煙弾を撃つた。

「あいつらを見届けたかつたな。まあ、さちならまかせれるか」獸の気配が肌で感じれる。もう、かなりの数が集まつているようだ。しかし、今日はかなりの獸が居たのか。まあ、俺等は滅び行く存在かもしけないが、小さな望みを抱く事くらい許されるだろう。

「さて、おっぱじめますか」

そう言つと、バリエは投擲爆弾の安全ピンを抜いた。

## 仮設拠点調査任務（後書き）

こんにちは、茶川です。  
更新が遅くなつてすいません。  
出来れば、週末中にもう一話あげたいです。

## 大好き（前書き）

お待たせしました。なんとか、月曜日に書き上がりました。が、ち  
ょつと内容量は少ないです。すいません。

## 大好き

結局、支部に全員で帰つて来た部隊は出撃した全24小隊中2小隊のみ、そして帰つてこなかつた小隊は3小隊。これが、獣が支配する土地へと踏み入れた代償。それでも、僕らは立ち向かう。

「1日休息のあと、2日間の連携訓練。そして、オオクラ地区へと移動。オオクラ地区の守備部隊と連携訓練を行い、オオクラ地区付近獣群れ分散作戦に参加する。」

とたちさんが、司令書の内容を語る。今は、たちさんが臨時に小隊長を務めている。

「質問は？……ないか。解散」

みんなはこの言葉を聞いて、とぼとぼと更衣室へと向かう。そんな中、和夏は突つ立つていて。

「どうしたの？」

「……あとで、用事ある」

和夏は、そう言うと更衣室へと足早く行つてしまつた。何とも言えないこの残された感。いわゆる、孤独感か？いや、ちょっと違つた。

「あつ先輩。」

と更衣室に入るや否や、僕より少しあとに戦場に入つた同い年の確か名前は、コーリが僕を呼んだ……どうか、来たのかよお前つて感じか？

「すいません。先輩。ちょっと聞きたい事が」

「何？答える事なら良いけど。」

僕は、軽量プロテクターを外してコーリを見た。

「この街でおいしいめしや知つてますか？」

「……えつ……そう言つ感じの質問？」

「……えつ……はい」

「……ごめん。言いくらいんだけど全く知らない。たちさんに聞いたら方が良いかもしない」

強襲部隊制服のパークーを脱ぎ、中に着ているインナーシャツも脱ぐ。今日は寝るだけ。そう信じたい。

それを洗濯室行のBOXにほり込み、シャワールームに入る。

「それなら、先輩今日暇ですか？」

ユーリーは僕を追いかけ、隣のシャワーへと来た。しかし、犬みたいな奴だ。つて、21世紀の人は思うかもしれない。まあ、今でも犬は居る。獣化しなかつた種がわずかに。そして、それはすべての動物に言える。全てが全て獣化した訳じゃない。原種の方が多い種もある。例えば、人。僅かながら、獣化した人もいる。詳しくは知らないけどね。

「あ～…。悪い先客が居てね」

和夏に呼び出しを食らうなんて初めて何で色々な事態を予想しているが。正直、

「怖い…いや恐ろしい」

「？先輩？なんかありました？」

おやおや、余りの恐怖の余りに口走ってしまったとは疲れてるのか自分。

「全く何でもない…最近疲れていて、ちょっとね」

しかし、シャワーよりも風呂にゆっくり入りたい。まあ、地上支部ごとにそんなものないか…。

シャワーの水を止め、用意していたタオルで体に付いた水を拭く。また僕の前から人が一人いなくなつた。

僕は、他の男子隊員より早めに更衣室から抜け出す。正直な所あまり更衣室は好きじゃない。まあこれは、僕に限った事ではないかも知れないが。

「おつ、湊お疲れ」

「さちさんお疲れ様です」

「嫁さんが待つてるぞ」

「…」

いやいや、笑い過ぎでしょ。」

「一応、速く行く事を進める」

さちさんはそう言つと若干嫌な顔をしつつ、更衣室へと足を踏み入れた。

さちさんは、どうやら僕と同じじらし。

まあ、それはそれでいいけども。どうでも良い事を考えるのはちょっと止めよう。そう自分に聞かせ、僕は自分の家へと向かった。家に入ると、いつもと同じく僕のベットは毛布と猫といつもライオンっぽい抱き枕が無造作に置かれている。

どうさつと、ベットに倒れ込む。今日も疲れた。

…。まだ、辺りは暗い。どうやら、まだよるらしい。しかし、いつも抱きついてるライオンがなんだかいつもよりあつたかくて、また違う暖かさがある。…ふう…眠い。寝よう。…。

…。つて…眠い

…。いやあ、なんだか僕は幸せだ…寝よう…。

…。つて…眠い…

…。また、フェイントと思つた人。人を信じましょ。うそ。

…。次こそはふざけてないと思つた人。人を疑いましょ。うそ

…。もういや、遊ぶの止めよう。僕が、こんな風に遊んでいる間に僕の抱き枕の位置にいる人はいろいろとごろごろ良いながら頭を僕の薄い胸にこすつてくる。いやあ、猫みたいだにやつかわいいね。

…。

…。鍵は…壊したの?」

「そんな事する訳ないじゃん。ピッキングした。」

「え?ピッキング?…あ~」

…まあ、和夏の技術を使いたら赤子の手を捻るとかより簡単に空けるんだろうな…。

まあ、僕も一応は出来るんだろうけど。

「んで、はなしって？」

「そうそう…って来てつて行つたのになんで、寝てんの？」

「いや、そつちメリット遭つたでしょうに」

「そうそう、むっちゃかわいい寝顔見れだし。私のにおいこすりつけれだし。」

「だしよ。という事で、寝ようか？」

「うん！一緒に寝よ！」

「いやあ、かわいいなあ～

「好き？和夏の事」

「大好き！」

「こういうときはとことんやり返さなくては。

「私は、湊の事が大好き～えへへへ～」

「僕は、和夏がだ～いすき！～」

バカッフルを演じ返すのは大変だ。うん。

## 大好き（後書き）

次は、週末までには

## ホホクラ地区（福島村）

遅くなつてホントによこません。

## オオクラ地区

2日間の連携訓練は実に辛かつた。1日目なんて、1日中市街地機動戦闘訓練をすると云ひ、司令部の暴挙に会い。2日目は連携訓練。正直、一緒に訓練をした部隊の新兵なんて2、3人倒れている。んで、今日はオオクラへの移動。

まあ、精神的には疲れ満タンだけど。たちさんに言わせると、最初に配属された部隊よりも楽らしい。

「よし。到着だ。荷物を持て、さっさと降りるよ。」

たちさんは素早く、自分の荷物をもつ。他の隊員も荷物を持つ。船が着岸したのと同時に、僕らは降りて行つた。

初めて来た、オオクラ地区は、僕からは、意外と栄えているなと思った。

オオクラ地区は、第2極東地上基地の現存する数少ないの地上農業地。元々は、獣の研究場所として、建設していた所だ。

「ここにちは。オオクラ地区守備部隊部隊長の優一です。」

と優しそうな顔の少年がたちさんと握手を交わす。なんとなく、同じ年に見える。

「ようしくお願ひします。強襲部隊第3小隊隊長の田中幸男です。」「早速、作戦の事ですが。3日前に獣で統制がとれた小規模な群れを確認しまして」

「統制ですか…。そのときはどのように対処しましたか?」

「隔壁上の移動砲で、牽制をしました。なにしろ、そのときは、そちらの方に部隊を貸し出していまして。」

「そうでしたね、確か…」

まあ、戦力が足りないので珍しく強襲部隊に協力を求めたと言つことか。今日は、移動だけでこのあとは貸し兵舎で睡眠。昨日、おとといと比べると、今日は天国だ。

「みなと。貸し兵舎にみんなを誘導したあとに、ちょっと用事ある

から来てくれ」「

「わかりました」

貸し兵舎は意外と近かつた。…正直な所、休みたい。無理な話だけど。

「んじゃ、各自休んで」

僕は行きと回りスピードでたちの元へと向かつた。

「悪いね。」

「いえ。それより要件は?」

「まあ、ちょっとね」「

それ以上聞かなかつた。まあ、なんとなく、聞くのがめんどくさかつたのがある。

「着いたね。」

とさちさんは足を止めた。そこは、オオクラ地区で一番北側の隔壁の上。

「ここから、見える…かなあ。」

と指差す。

「あれが、太古の壁」

「…。アレが?」

太古の壁は、なぜか、出来ていた壁。だが、この壁がなければすべての地上支部は出来なかつた。今見た、太古の壁はものすごく大きく、そして全く人工物ではない自然の物のように見える。そして、なぜか恐怖を感じた。

「どう?」「

「なんか、す”いっす」

「そうだね。それは僕も思う。あと、なんか怖くない?」

「た・・・確かに。」

「あれは、人が作った物ではないっていう論がある。僕はこの論を信じるけど」

この論はわかる。何か人を寄せ付けない気配がある。

「さて行こうか」

と、たちさんは先に兵舎へと帰った。僕も少しあとにその隔壁から離れた。

ほんとに、僕は小さい。

身長も精神も

「では、作戦を説明する。」

と、優一さんがホワイトボードに地図を貼る。

「今回は、主に森の中に隠れている獣の群れを森の外にだす。これのみ。」

森の詳細位置を書き込む。

「支援は？」

「本部の対大型獣用砲のみ。」

「それは、追い出した後ですよね」

「そうだな」

「…。きつい。大体40人で、大体20体を相手する。2対1…。正直やつてられない。」

「あと、3人一組に分かれて行動。以上。装備をすませ作戦を開始。」

「僕は、素早く軽量プロテクターを着て対獣用刀、槍を装備する。

「みなど。メリーヒューリを頼む。」

「分かりました。」

さちさんは、僕の隣に居た。和夏にも、誰かを頼むと言った。

まあ、分け方としてはそんな所じやないだろうか。メリーヒューリは戦闘能力は高いけど、未だに精神汚染状態から完全には脱していなし。メリーヒューリと比べると和夏は比較的安定感もあるし。

「よし。全員。装備確認！」

僕は、和夏に確認してもらい。和夏の装備を確認した。

「出撃！」

## オオクラ地区（後書き）

冬休みに突入したので更新速度をあげて行きたいとは思っています  
が…。  
まあ、頑張ります…

**群れ（前書き）**

クリスマスは楽しめました。自分はですけど。  
そして、かきあげれました。

僕は、討伐隊4分隊を率いている。正直実感なし。

「…。とりあえず、囮なんだね。」

「あとは、信号弾街だね。」

メリーは、いつも通り少し悲しげな顔で言つ。

「先輩…。」

「なに?」

僕は、いつも通りの声で言つ。

「怖つす。先輩は?」

…。そう言えば、獣に対して恐怖を覚えた事はそんなにない。

「慣れた。」

僕は、そう言つておいた。本当は違うと思つけど。

しばらくの沈黙が流れる。まあ、仕方ない。ここは、緊張のほぐし方とかを教えると好感度は上がるんだろうな。正直めんどくさいけどね。

「じょうもない事をうだうだ考へてる間に信号弾上がつたよ」

…。

「さて、行きますか。」

僕は、強く地面を蹴る。森の中では、人間はある程度有利だ。理由は言わずとも理解できるであろうが、市街地機動に近い、いや、機動戦が可能だからだ。まあ、獣の猿類は森では更に厄介だが。

森の近くで待機していたとは言え、まだ、木の上での高速移動が出来るほどの木の密度が少ない。

大体1分走ったあたりで、木の密度が上がって來たので大きくジャンプし、木に飛びつく。

「赤色信号弾多数。」

「早すぎでは?」

時間は、朝明けぐらい。通常は、獣はまだ活動が鈍いはず。

「まさか、気付かれていた？」

僕は、近くの木に止まる。

「…。廻り見とけ。探索する」

僕は、耳を澄まる。

何かがいつもと違つ。森が落ち着きがないのだ。他の森にはないものが聞こえる。

「…。黄色信号弾！」

「やつぱりなんかあつたな。」

「なんかって？」

…。なんかって言った時点で分かる分けないだろ？

「なんか…」

メリーガ僕の言いたい事を言ってくれてよかつた。僕は、オオクラ地区の一番近い隔壁へと走りだした。

「湊。お疲れ。」

和夏が頬を少し緩ませ、僕の方にはたばたと走つて來た。

「和夏こそ。お疲れ」

「メリーもお疲れ」

「ん。お疲れ」

と、メリーや和夏は頭をなで回されて、くしゃくしゃにされている。メリーやの髪は無茶苦茶ストレートなのでもみくちゃにされても、まつすぐに直つている。

「…。」

「やめて～」

メリーやがやり返しどばかりに和夏の髪の毛をなで回すと、和夏の髪はメリーやと比べると若干癖つぽいので若干荒れています。

「…。くしゃくしゃ…」

メリーやがにやりと少し笑つて言ひ。

「つるさいなあ…！悪かったなー癖つ毛で」

「…かわいい…」

とメリーガ更に和夏の髪の毛をなで回す。

「…。女の子は良いな…。ふと思つた。まあ、ただ単に僕が髪の毛が好きって言つ理由から僕が思つてゐるだけかも知れないけども。」

「湊居る?」

「なんじょ「う?」

「いや。さつきの撤退の理由だね」

「何だつたんですか?」

「獣の群れどうしの戦闘。繩張り争いだね。近く、冬に入るし。確かに、隔壁内にテリトリーをもつと言つてみれば、食料には困らない。スーパーの中に暮らしてゐみたいなもんだ。しかも、盗んでも気付かれない。」

「そう言えば、もうそんな季節ですか?」

「まあ、君等はここ3年間ぐらいた地下で暮らしてたみたいなもんだもんね。」

「で、結局獣狩りは?」

「とりあえず、様子見だね。明日、明々後日ぐらいまでやり合つてるだろう。かなりの数を確認したし。」

「そうですか?」

「兵舎で休めるのかな?淡い期待を抱いておひつ。」

「ま、取り合えず僕らはここでしばらく待機。」

「了解」

もうすぐ、冬ひつことだけひつ、寒い感じだ。今、着ているパークーはそこそこ薄いので結構寒い。中に、保温系のTシャツを着ていたよかつた。

ここで待機つて事はみんなに伝わつたらしく、みんなは少しげんなりしている。まあ、和夏とメリーアは例外らしいけど。

そのまま、大体4時間は待機と言つ名田で外に居た。そのあと、すぐ兵舎に戻らしてもらい。オオクラ地区の名物でもある温泉に行く事になつた。まあ、温泉と言つてもオオクラ地区の軍用地ないにある風呂場だが。

「いや～生き返る」

「…。ホントに、お前10代？」

コーリに誰もが、突っ込んだ。あつたかい湯船に体をつけたときの何とも言えない快感は分かるが。いつも通り、体と髪の毛を洗い風呂に片足をつける。

「アッ…！」

思わず、飛び跳ねてもうた。足はかなり冷えてこるらしく。もう一度、意を決して足をつける。

ほら来た。この何とも言えない…痛み…。痛い…。

「ふう…。良い湯だねえ」

とさちさんは実に気持ち良さげな非常を浮かべる。風呂つて良いな。今日は、そう思った。

風呂から上ると外は、雪が降り出していた。外の景色を僕は、一人で感傷に漫りつつ見る。明後日か。正式決定は。

「今日は?どうする?」

気がつくと、和夏が僕の隣に座っていた。

「ん?どうするって?」

「久々に…」

「…そう言えば、そうかそんな時期?」

正直、それをするのがめんどくさい。僕と、和夏にとって実際に必要な事ではあるが…。

「何そのいやそうな表情。」

「だってさ、研究者もひちよいなんか、考えてくれば良かつたんじゃね?」

「まあ、…確かに。結構恥ずかしいし」

…。結構で済むのかいな。僕からすりや、結構びじびじやない。正直、顔は普通な僕が美少女な和夏とあんな事をしたくない。

「でも…私は好きだけど…」

「え...?ええええええええええいいい?」

ぐらつと来て…。

「ちよつ……みなど……しきかりして……」

あ、せいかし…こんな机…であつたかくてやさしかしながら…。  
なんで寝てるんだ。

。あ、確か寝てるね

いやいや、原因は

アレか  
。前と同じつて思つた人。ごめんなさい。

何これって思つた人。読み直しやがれ！――

すいません。調子乗りました。

「お。ねむる」

和夏が僕の真上でにこつと笑顔を作る。今は、お風呂上がりってこ

「。なんで漆尻」とて髪の毛をまとめているらしい。可愛いな

「……。気持ちいいかなって」

「…。配慮してくれたの？」

卷之三

一一  
「

和夏は顔を真っ赤にして、そっぽを向いた。そもそも、頭をのけてあざなうことから、そうなので、僕は体を起してしまった。

おにないとかれい子うがので 僕は体を起こりた  
すこし、体のだるさを気にしつつ僕はすこし大きいあくびをした。  
「。そういえば、するんじゃなかつた?」

〔……〕

「くりとうなずく和夏可愛いねえ。」

…。ヤバい。いつもながら緊張する。大きく深呼吸をする。平常心。平常心だ自分！出来る出来る！－

「それじゃあ、行くよ。」

「きて」

僕は、和夏へと近づく。顔と顔が大体あと30センチ。…。平常心。そうだ。どうせ一ヶ月に一回してるんだ。そうだ。生まれた時…いや、それは言い過ぎだな。まあ、でも4歳くらいには僕はこの和夏の生命を保つ為に必要な、獣化細胞の毒素の吸い出しを行つて來ている。

あと、5センチ。その、毒素の吸い出し方法は簡単。

あと1センチ。屬に言つ、キスをすれば良い。

唇と唇が触れた…。

毒素の吸い出しあとは、けつこう体がだるい。まあ、和夏の毒を僕が大体半分くらい接種して、消化していく。まあ、すつすぐはづらい。

「…。ありがと。」

「いいよ。義務だし。」

そうこれば、N282細胞をもつ僕のプログラムの一つの一つ。N383細胞をもつ被験者のアシスト用の細胞。N282細胞の被験者は、いわばN383細胞をもつ被験者が居なければ存在価値がない。

すこし、体に毒の影響が出てくる。ちょっと、気分が悪い。

「だいじょうぶ？」

「…。」

うなずいて、僕は、震える体を起き上がらせた。

「いや、今日はゆっくりして行つて」

「まだ、ぐらつと来た…。」

## 越冬隊（前書き）

内容は少ないです。…まあ、これは次への布石って感じなので。  
はなしが進むほどにクオリティも落ちてる気がしますが…。

結局、僕はその夜は和夏とメリーの部屋で寝ていた。まあ、体調が悪かったし。仕方なかつた。と自分に言い聞かせたい。目が覚めれば、隣でかわいらしく和夏が寝ていた。

「ラブラブだね」

「ラブラブで何が悪い！」

メリーには悪いけど開き直つてみた。

「…。まあ、いいね。見てて楽しいし。」

「…え？ そう言う反応？」

「え？ そりゃないの？」

「まあ、いいや。そんな風に思われてたなんて意外やね」

「…まあ、私はあんたら見守るって決めたし。」

メリーは、パジャマとして利用…いや、キャミソールの上にパークーを着て、むかいのベットから降りた。

「出かけるの？」

「ちょっと、水とつてくる。要る？」

「要る」

「ん」

とメリーはすたすた部屋から出て行つた。相変わらず、クール。いいなあ～

和夏を見ると、さつきかわらず寝ている。若干乱れている髪の毛を触る。和夏の髪は芯が全くないゆるゆるで柔らかい。わざわざと触り続けている。ん~やらけえ~～～！

「獣は現在も総力戦中…。」

「なんですか。んじや、今日も？」

「いや。訓練」

…。訓練か

「今日こそ一戦闘?」

「獣の群れはどうちも壊滅。」

…。マジか。

僕らは、予想もしてない展開で極東第2地上支部に戻つて来た。僕らは、最初の戦闘で4人を失つて帰つて来た。どうやら、僕らが居ない間に状況は変わつている。

「これから、第6次中部仮設拠点の越冬隊を結成する。」

桐山が、ハキハキッと言う。

「第3小隊。第5小隊。第13小隊、第21小隊は参加。あと、志願する物は志願書を書く事。以上」

中部仮設拠点越冬隊…。極東第2支部名物。これは、地下の部隊も参加する。ホントに、厳しいしどこよりもつらい。

この、部隊派遣の理由としては第3隔壁修復。今まで4回の部隊派遣で下準備を終えたらしい。そして、今回の既に結成式を終えた第5次中部仮設拠点越冬隊は、第3隔壁の穴の外側に展開。獣の侵入を防ぎ、第6次中部仮設拠点越冬隊は修復と隔壁内の獣を狩る。

僕は第6次中部仮設拠点越冬隊で良かつた。心の底から思う。僕はともかく、和夏は本当に戦闘能力が高い。だから、最前線の第5次中部仮設拠点越冬隊に和夏の補助として入れられるかと思っていた。まあ僕が思つてゐるよりも世界は広く、和夏より強い人がたくさんいるんだろう。

「明日後日出撃。まあ、今日はゆっくり休め。」

さちさんは、僕の頭をポンと叩き兵舎へと消えて行つた。

…。どうした物かな。この前、毒の吸い出しやつたし。正直やる事がない。今日は久々にゆっくりとするか。僕は、一人で兵舎へと消えて行つた。

「これより、第6次中部仮設拠点越冬隊の結成式。及び、第5、6次中部仮設拠点越冬隊の出撃式を執り行う。」

極東第2地上支部の支部長を見たのは入隊式以来かもしれない。式は、淡々と執り行われ大隊1時間後には終了した。

そして、準備に入る。越冬。冬を越すだけあるので装備はかなり防寒系だ。まず、パークー。その上にプロテクターそして、コート。あと、レッグウォーマーも使用を認められている。ホントに、レッグウォーマーは有り難い。

装備を整え終え、馬車に乗る。僕は、第14支援小隊に和夏と共に編入されている。最前線から、戦闘小隊、支援小隊、待機小隊、補給小隊。言つてみれば、2番目に危険。なかなかの危険度なのだ。馬車は、既に走りだしている。全部隊を使っての大規模作戦。地下の部隊は基本的に越冬隊に配属されている。

気がつけば、無線では、戦闘部隊への出撃準備を促す無線が流れている。

「戦闘部隊は展開。ただちに、防衛線を展開。絶対に通すな！」

「続いて、支援隊は準備。」

僕は、対獸用刀と槍、プロテクターが装備できているのを確認した。

「出撃！展開急げよ。大砲の準備は早くやれ！」

隊員が降りて行く。

「行こ」

「行きますか」

僕は、和夏に返して馬車から降りた。

## 初戦（前書き）

遅れですいません。頑張つて、更新速度を上げて行きます・・・

すでに、そこは戦場。僕らは、生存競争に打ち勝つ為に来た。

「砲台設置だ！手伝え」

「了解」

僕は、馬車から、荷物を降ろすのを手伝う。信号弾は止めどなく上がっている。

隔壁の中の守りたい人を守る。それが、僕ら。

「砲台準備完了。よし。設営するぞ！」

今、僕が居るのは最終防衛ライン。今は、設営の人たちが多く投入されているけどあとあとは、補給隊と支援隊が居る。…。他の第3小隊の人は何してんだろう。

「…。抜かれたらしいな。第5、8、14支援隊。出撃！」

無線の報告を受け、僕は、和夏にアイコンタクトをとり戦線へと向かう。

「第14支援小隊は、いま、赤色をあげる奴に続け。」

僕の大体50m先の人人が赤色信号弾をあげた。それと同時に人は集まつてくる。

「よし。今、軽く自己紹介をしておく。さつき信号弾をあげたのは俺。俺はザークだ。一応隊長を務めている。…戦闘に入るぞ。生き残れよ」

赤く染まった獣が迫ってくる。槍を僕は取り出し、一回深呼吸をした。

平野での対獣戦闘は市街地戦闘と比べると生存確率は低い。

「砲火支援が始まる。展開の際は注意しろ」

槍を放り投げ、獣を止める。幸い、高機動型は居ない。まだ、マシか。和夏が僕が止めた獣の背骨をうまく斬った。

次の獣をうまく、背骨を斬る。かなりの数だ。撤退命令が出るまでそれを相手にしなければ行けない。それが、この越冬隊の戦闘隊と

支援隊の仕事。越冬隊に配属されて生き残った、戦闘隊と支援隊の人間は洗練される。

「…。和夏？」

僕は、立ち止まっている和夏のそばへと向かうが、獣たちがそれを阻む。獣たちを避け、一匹一匹懇切丁寧に背骨を斬る。若干、切れ味が落ちたが、気にはしていれない。近くの獣を狩り終わり和夏を見ると、和夏は近づいた獣を斬つていた。あの日みたく、髪の毛を赤に染めながら。

獣の血で、いや血で獣化細胞は活発化される。和夏の獣化細胞は活発化した時に毒素をだす。僕の場合は、活発化した時に和夏の獣化細胞が出す毒を消費する。まったく、もうちょい便利に作つてほしいよ。さんざん、研究材料にしといて。

他の隊員が助けを求めた、が僕は見た時には体が半分なくなつていった。僕は、正面から獣を斬る。喰うか喰われるか。

次々と、人が死に。次々と獣も死ぬ。

大体、1時間経つただろうか。その時に、静かだつた無線から撤退の命令が流れる。気がつけば、コートは真っ赤。そして、槍は0。対獣用刀も刃こぼれしている。そう言えば、和夏はどこだろう。

「みなど。退こう。」

後ろを振り返ると、真っ赤な和夏が立つっていた。

「そうだね。」

僕は、背後に迫つた。獣を避け、背骨を断ち斬つた。

「さちは…。なんでそんなに…平氣な顔をして…いる…」メリーは、息を切れ切れにして言つ。するとさちはいつものテンションで

「まあ、慣れだよ。2回目だし。まあ、軽傷ですんでよかつた」と言いながら、メリーの傷の手当を終える。さちは、もともと衛生兵なのでメリーの折つた傷くらいはすぐに手当をできた。

「しかし、あいつら遅いなあ。」

「…和夏と…湊か?」

「まあ、他は帰還と死亡の報告が入ってるけど。」のあとで、また、部隊を結集するしね。」

さちは、ウエストバックから文庫本を取り出しメリーに渡す。

「どうせ、暇だろ？ 寝てる間。時間つぶしに貸すよ。」

さちは、そう言つてメリーの手を握つて、何かつぶやくと他の負傷者のもとへと向かった。

文庫本のタイトルは、探偵ガリレ。…なんだこれ。この本だろう。とりあえず、かなりぼろぼろなので随分古い本だらう。…私、手を怪我してるから読めないじゃん。今更、気付いてしまった。

僕は、結局和夏を背負つて中部仮設拠点へと帰つて来た。まあ、なんとかだった。

「お～。生きてたか？」

とさちさんが和夏をおろすのを手伝いながら言つてくれた。

「まあ、一応。血まみれですけど。」

「和夏は？」

「多分、負傷なし…でも、毒が分泌されてると思いますけど。」

「…分かった。まあ、メリーも怪我してるし同じテントにいっか。」

さちさんが押すベットの上には和夏がぐつぐつと寝ててゐる。まるで死んだかのようだ。脈はあるけど。

「うい～。元気？」

「…そんなに」

「だよね」

僕は、一人でテンションを落としつつ部屋にある椅子に座つた。とりあえず、君等が生きててよかつた～とさちさんは、僕の頭を叩いてテントから出て行つた。

「よかつた。」

「…。こつひよかつた。」

ウエストバッグから、取り出した水筒に口をつけながら言つ。とりあえず、「コートは脱いでいるけど。髪の毛とか、ズボンには血が付いたままで、やつきの事がフラッシュバックする。

「和夏は……？」

「多分、疲れているのと毒の影響かな」

「…。赤。」

…。髪の毛の事だらう。ホント、この髪が赤く染まるのはなんだか好きじゃない。

「湊の目が…」

「ええええ？？？」

僕の目は茶色のはず。意味が不明。意味不明。摩訶不思議？世界七不思議？

「いや、茶色か」

「ふう…びっくりしたよ…」

本当に焦つた。今時珍しい、日本の純血とロシアの混血なんだから。まあ、日本人らしい面は目だけだけども。髪はなぜか、変な感じに金色。髪質は女子が結構つらやましがる、超ストレート。

「…ふふ」

…珍しいね[冗談なんて]

ちなみにメリーは、バリバリのロシア系。なんで、目は青色。髪は黒いけど。

「まあ、時にはね。暇だし。」

そう言つと、メリーは急にベットから、降りてスリッパを履いた。するとすると、和夏の寝ているベットによるとにやりと笑う。そして、怪我をしていない方の手の指を不気味に動かす。指が別の生き物みたく、別々に動いているのだ。

「やああ…！」

「…喰らつたか！」

とメリーは自慢気に僕の方を見る。そして、やつきの悲鳴は和夏の物。

「また、下らぬ物をくすぐつてしまつたか…」

「ヤリと次は親指を突き立てた。

「…。いやあ全く…大丈夫?」

少しばかり、くすぐりを喰らつた和夏を心配して立ち上がる。

「湊お…」

目を潤い付かせた、和夏が僕の方を見る。正直、ヤバいぐらい可愛  
い。

メリーの方を再び見ると、また指を立てた。…。なんだよ、全く。

「…起きてたの?」

「起こされた…。」

すこし、ムスッとした表情を浮かべている。

「痛い所はない?」

「ない。心は痛い。」

…。

「分かつた」

また、下らん事を聞いてしまつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3296z/>

---

Rebellion to Jupiter

2011年12月28日22時45分発行